

ルギルつづき)・・そうですね。この出会いのことはよく覚えています。最終的には、彼女が妊娠したときのことを教えてくれました。子どもを持ちたいという欲望にブレーキをかける次元のものを、彼女が乗り越えることができたときのことでした。そんなふうに、私は臨床の出会いに、ついに飛び込んでいったというわけです。

インタビュアー) つねに知的な要求からのひとつの考えにもとづいて、ですね。それと同時に、ある仕方で、あなたは臨床と対峙することができるようになった、ということでしょうか。

ルギル) そうですね。本当に、今になって思うのは、あの危機を体験しないでいたとしても、そして単に哲学の道だけを追求しているのだったとしても、私は自分に当時欠けているものがある、それは実践だと思っていた。哲学はやはり、アリストテレスが言うように、テオリアですから。テオリアの次元のなかにいるわけで、知的な実践の次元にいます。

ですから臨床は私にとって、パロールと知と結ぶ、まったくべつの関係にまつわる実践でした。分析的臨床は即興的な技術(art)を想定しています。つまり、ひとは分析をやっているとき、全然退屈しません。というのは何も準備できないからです。すべては不意に生じたり、適切なときに何か起こったりするような問題で、無意識の形成物が生じたりとどろくときを、やり過ぎないようにすることが肝心です。私は分析的実践は生き活きたものだと思います。ある患者のことを思います。彼女は色々話すなかで最近パロールを学ぶことの難しさを私に語っていて、でも最後に、「私は話すことを学びたい」と言いました。それで私はそこでセッションを区切ったのですが、彼女は爆笑していました。私はその時区切ることさえ考えてはなくて、でもやはりそれはそのときやってきた、分析家の「行為」ですね。区切りはひとつの「行為」から来っていて、それはほとんど思考しないで生じているものです。

インタビュアー) こう言ってもよいでしょうか？あなたの哲学との関係についての問いというのは、「何の役に立つのだろう」、「それは私の役にたつのだろうか」、だったと。

ルギル) はい。つまり私は自分の存在において本当に生き生きとした家族のなかでいて、そういう家族との関係のなかでは、ひとつのオリエンテーションが必要だったのです。私の父は映画業界で仕事をしていました。ですから困難な時期ですら、つねに新しい何かが家族にありました。撮影もありました。ですから父と母のカップルには、つねに信頼関係にまつわるものがありましたが、それでもとても予測不能なところもあったのです。

そういうわけで、私はすごく色んなことが起こる雰囲気の中で育てられました。だから私は「知」にしがみついていたね。結局は私の存在にひとつの方向性を与えてくれるような何かとして、「知」にしがみついたと思います。それから私は「知的な女性」という考えが好きでした。シモーヌ・ド・ボーボワールがもたらしたものの考えは本当だと思っていた。

知的で哲学的、さらには偉大なジャーナリストたちの生活においてパイオニアであった女性たち—ロー

ラ・アドラーとかーのことを私が聞いたときには、やる気になりましたね。私は知的な女性が好きでした。彼女たちは私にひとつの欲望を伝達してくれました。それは発言し、明晰な思考をもつ女性になりたいという欲望です。

私はそうしてやる気になり、知のほうへ道が拓かれました。母もそれが好きでした。母は文学の勉強をしたことはありませんでしたが。でも母は家族に人生を捧げていました。そうですね、彼女は働いていましたが、文学の勉強はしていませんでした。

私はすごくそれが好きで、この方向で知にしがみついたのですね。でも最終的には、精神分析こそが、知を発見させてくれたと思っています。知が欲望と結びついていて、欲望にしたがって、存在に真の方向性を与える目的を持っていました。そういう感じです。

それはべつの方向も与えてくれました。じっさい、先ほどあなたが言ったように、知との私の関係に対して、べつの方向があります。確かに知というものは、単に知を生産しつづけるのとは別の目的を持っているものです。

インタビュアー) 結論として、さらにひとつ質問させてください。精神分析の未来についてどうお考えでしょうか。分析や臨床の方向性。私はどういう定義をあなたがなさるのか分かりません、特に「現代の」それらについてです。あなたが語っているテーマですね。今日精神分析の未来について、あなたは どうお考えですか？

ルギル) 私はこの質問にはかなり興奮します。精神分析の未来について、ですね。なぜかと言うと、私はこの時代が好きだからです。この時代に生まれる幸運に恵まれたという印象をもつからです。というのはまさに精神分析はおそらく愛、セクシャリティー、不安、欲望、欲動、享樂についての問いにおいて、方向性を見出し得る、唯一のディスクールだと思うからです。それらに関して、精神分析は本当に今の時代において果たすべきものを持っていると思います。20世紀の初めには、精神分析の黒本のときがありました。たぶん、60年、70年代に精神分析のヘゲモニーと呼ばれたものとの関連で、批判が起きたときのことです。それは認知行動療法の心理学が評価されることに資する、批判の時でした。そしていま、20年経ち、臨床の中にその批判が見られます。つまり認知行動療法が不安や欲動の問いに答えていないということです。

たとえば「同意」についての私の仕事との関係で、それを確かめることができました。トラウマの問いのようなものにおいて、どの程度まで「明らかにしたい」という欲望が存在するのかを、私は見る事ができました。理論的なディスクールや戦闘的なディスクールであるだけではない、言説によって明らかにしたいということです。それは必ずしも矛盾しているわけではありませんが、特異な経験に基づくディスクールであり、それぞれの主体がセクシャリティーの発見あるいはトラウマを生む悪い出会いにおいて、生きることができるものに基づくディスクールです。

今日私の関心事となっているのは、若者たち、若い患者たち、若い学生たちのあいだでも、それが反響し合っているということです。つまり欲望のこの問いが重要だということが興味深いと思っています。なぜなら、ラカン派の精神分析以降、ラカンが欲望を扱うやり方によって、あなたが欲望について語り始めるのならば、あなたは本当に的を得ていると理解するでしょう。つまりそれは各自のへそとなる点（肝心な点）に触れるのです。そして各自が、自分の存在と欲望とを結び付けたいと欲するのです。

インタビュアー) あなたは「同意」についての本でそうおっしゃっていますね。たぶん精神分析はより内密でより個人的な「私」(je) のために、主要な飛翔となり得るでしょう。たぶん今日、まさにその「私」のために、まだひとつの場が存在しうるのかどうかに、かかっているのでしょうか。

ルギル) そうですね。確かにそれが以前書いたエッセイのテーマでもありました。諸アイデンティティを横断する「私」についてがテーマでした。そこで私が示したかったのは、結局のところ、私たちは文明が提供するさまざまな提案のなかを生きているということです。自分自身のデジタルの代役や主に自我の代役をとおして、デジタルの世界、仮想世界で生きるという提案。これはナルシズムにそった提案であり、つまりその価値はあるが、欲望と出会うためには充分とはいえない提案です。二番目の提案と私が思うもの、つまりむしろ科学からなされる提案もあります。自分の存在に対してとても量的な関係をもっていて、ついには自身が科学的対象となってその感情とトラウマのロジックに近づこうとするものです。それから3番目の提案は、より政治的なものです。少しアイデンティティ主義的で、共同体のアイデンティティによって定義されるものが3番目の提案です。

これらの三つの提案は、それぞれその機能を持っています。それぞれ政治的、倫理的な機能をもっているでしょう。

4番目の提案は存在に意味を与えるためのもので、パロールを通して「私」の何かと出会うものです。つまりそのひとの欲望の何かと出会うものになります。分析の経験というのは、自己中心的な経験ではありません。それとは反対に、ある他者に語る、自分の存在について語るという、同意の経験なのです。自分のことは自分では分かりません。分析の経験のなかで、ひとは「私」と出会いますが、ひとりの他者のように自らと会うのです。ひとは「私は私に等しい」と出会うものではありません。他者であるような「私」に出会います。じつは、この視点からこそ、ひとは自分の欲望の謎を問うことができます。こうしてこそ、ひとは欲望をもう怖がらなくなるに至り、ラカンが言うように、「欲望を譲らない」ということが可能になります。

インタビュアー) あなたはむしろ楽観主義者だと、言えませんか？

そうですね。楽観主義という用語を使うかどうかは私は分かりません。私は確かにフロイトに立脚しています。彼は文明との関係では、あまり楽観主義的ではありませんでした。ですから私も楽観主義者ではないと言いましょ。でも言いたいのは、私は十分なくらい精神分析に熱中したので、欲望のロジックは現代のディスクールにおいてその場を見つけることができると理解はしているということです。そ

れには条件があります—分析の経験をすることと同時に、分析的なディスコースを発見する、そのための場が複数存在しているという条件が必要です。結局のところ、伝達の問いに私はこだわっています。特に伝達の問いにね。

インタビュアー) 複数の場についてですが、ある種、あなたはそれを創造していますよね。あなたの発言や、あなたの著書、「無意識」というタイトルで放送されるポッドキャスト番組のことです。あなたがそれらの場所を、伝達するために整えているのは本当のことです。それこそが本質的なことです。たぶんあなたは楽観主義者ではないでしょうが、物事を整えています。

ルギル) そのとおりです。言い換えると、いっぽうで、大学が存在していて、それは伝達の場所です。私は精神分析学部にいるという、大きな幸運に恵まれています。そこは例外的な場所です。フロイトとラカンを教えることができるからです。そこは心理学ではなく精神分析の学部なのです。ですからすでにそこは伝達の場ですので、それは肝心なことです。しかし実際、大学の外でも、私にとっては書くということをとおして、伝達が存在しています。

最初の私の本は、「恋人たち」について、でした。つづいて、より大学的な書物を書きました。「サルトルとラカン」についてで、存在とジェンダーについてです。しかしたとえば「恋人たち」、「私」と、「同意」は、3つのエッセイなのですが、私の特異な声 (voix) が覆っていると思います。私にとり書くということは、今日では、趣味で、書くことへの趣味、伝達するための趣味です。それは読むと同時に声を聞くことによって、つまりひとつの声を会することによって行われます。

それこそが、一冊の本を発見して、その本が私を覆したり、感動させたりするときに好きなところなのです。つまり、最終的には、私が理解するのは作家の声だからです。実際には書物が存在し、ひとつの声を反響させています。つまりそれは実は単なる理論的な戦いや学派争いとは違うものですし、それらが精神分析により考えを与えるのでもありません。

私たちはもうべつの時代にいると思うのです。それらの争いは結局は教条主義のもので、互いに対立し合って終わることになります。べつのときに来ているというのは、分析の経験をした人たちによる、とても特異的な伝達が必要なとき、ということです。この経験について何かを言うことができる人たちの、伝達が必要なときのことですね。

それからラジオがあります。声について語っていたのですから、確かに私はラジオが大好きです。本を出版するにつれて、幸いにも招かれることが多くなりました。特にアデルのやっている「哲学の道」(ポッドキャストの番組)によく招かれます。それからフランス・インターの番組「無意識」というシリーズに協力しないかと提案をされました。そのおかげで私は演劇の世界と再会を果たしました(注:「無意識」のルギルの回では演劇作品等も扱っている)。

それで私が最終的に思うのは、人生で良いこととは、ひとが欲望の側にたつとき、ある一定の時間が過

ぎると、それまでに蒔いた小さなものが、のちに再び見つかるということです。ときどきはずいぶん後になってからそれが起きますが。ちょっとした種は、私たちの何かの役に立ったのです。結局、ひとは自分自身の特異な声をつかって、伝達する方法を編み出すということなのでしょう。

インタビュアー) その声をつかって、その道—これは *voie* です—を描き直してくださってありがとうございました。その旅はまだあなたにとっても途中ですね。というのはそれはいろいろな他の道を開拓することにつながるのでしょうし、ほかのテーマについてもそうでしょう。あなたはテーマの続きをより掘り下げても行くだらうと想像します。本当にありがとうございました。

ルギル) オリヴィアさん、ありがとうございました。

インタビュアー) 臨床は準備されないし、先取りすることもできないし、適用すべきひとつのプロトコルに還元されもしません。たくさんの旅と多くの出会いをあらかじめ私が知っているなら、私の患者にとっては良いことです。あなたにとってはひとりのプシはあらかじめ知らない者です。あなたとともに旅をすることを許可し、その道とあなたの道のあいだで構成するのを許可するのは臨床家です。クロチルド・ルギルさん、欲望、愛、そして知のあいだにある彼女の声を私たちと分かち合うことに同意して下さったことに感謝申し上げます。臨床は決してあらかじめ描かれた一本の線に還元できません。しかし基本的に欲望、旅をし、出会う欲望を召喚します。ラジオ番組「プシのお話」